



Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

ホームページもご覧下さい。http://www.amsl.or.jp

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@oki-zamami.jp



## ● ‘毛’の生えた貝

### ーロウソクガイとウミヒドラ類ー

いつも冬の慶良間は曇りがちで、波もあるし寒いものですが、今年は特に天気の良い日が多いように感じます。海の中に入っただけで、寒さは同じはずなのですが、やっぱり晴れた日のほうが気分が軽いもので、そんな日に調査が早めに終わると、すぐに帰るのがもったいなくて、すこし余計に海の中を見て回ります。砂地にはサンゴもいないし、生き物もあまり多くないので調査する機会が少ないのですが、そういう寄り道の時間がある時には、時折砂の海底を泳ぎます。すると、ポツンとウミエラの仲間が立っていたり、ホタテウミヘビの仲間がひょっこり鼻の先を砂から出していたり、楽しいものです。そんな砂地で出会った生き物の一つを今回は紹介しましょう。

砂地で巻貝を見ることは珍しくありません。マガキガイなどはよく砂の上を移

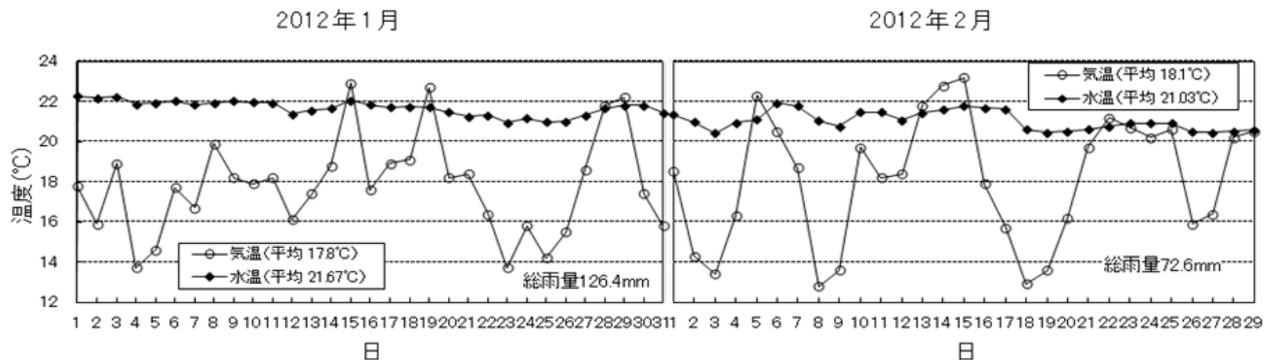
動していますし、砂に引かれたすじの終点を掘るとタケノコガイの仲間が出てくることがあります。また、思いがけず大きなトウカムリに出会ったこともありました。今回紹介する巻貝はイモガイの仲間、それ自体は珍しくないのですが、奇妙なことにそれには‘毛’が生えていたのです。水の流れに乗って、貝殻の上の‘毛’がふわふわとたなびいていました。毛の生えたイモガイなど聞いたことがありませんが、あたりを探してみると、ほかにも数個体同じような貝がいました。そこで、さっそく1個体を研究所に持ち帰り、その‘毛’を顕微鏡で見ってみました。それが写真1です。

なるほど毛のように見えたのは、もちろん本当の毛ではなく、ヒドロ虫という別の生き物でした。ヒドロ虫

は、サンゴやイソギンチャクやクラゲと同じ刺胞動物の一員で、もっと単純な体のつくりをしている動物です。ヒドロ虫の多くの種は、ストロンと呼ばれる植物の地下茎のような部分からたくさんの個虫（ポリプ）を出して、群体として暮らしています。個虫は、イソギンチャクのように触手を伸ばしてエサをとらえて食べます（写真1はたくさんの個虫が触手を伸ばしているところです）。このイモガイはロウソクガイで、その貝殻の上にヒドロ虫であるウミヒドラ属の一種が群



## 定点観測



体をつくって暮らしていたのです。

実は、慶良間の海では、このほかにもクロザメモドキ（イモガイ科）、ニクイロフデガイ（フデガイ科）、ミノムシガイ科の一種、ムシロガイ類の一種などの巻貝でもヒドロ虫を見つけています。これらの巻貝とヒドロ虫との関係が、どのくらい密接なものなのかはわかりませんが、過去の研究報告を見ると、タマクラゲというヒドロ虫は特別な仕組みでムシロガイとだけ共同生活を始めるため、共生関係にあると考えられています。もしかしたら慶良間の巻貝とヒドロ虫も似たような関係があるのかもしれませんが、どうなのでしょう。

共生関係にある生き物は、互いに得をし合っていると言われますが、それでは、このロウソクガイとヒドロ虫にとっての得とは何なのでしょう。刺胞動物と共生する生き物の得は、その毒針で身を守ってもらえることと考えられることが多いのですが、人間の手で触っても何ともしないこのヒドロ虫の毒はそんなに強いとは思えないし、ロウソクガイはそもそも固い殻を持っているので、身を守るといふ点からはヒドロ虫がいてもあまり得はないように思えます。けれども、ヒドロ虫にとっては得がありそうです。それは、貝が動き回ること、エサをとらせるチャンスが増えると思われるのです。冒頭の写真を良く見てみると、ヒドロ虫の個虫がたくさん生えて大きくなっているの

は、貝の進行方向からすると後ろの下の部分です。きっと貝が砂地をはいまわると、ヒドロ虫の個虫は引きずられて、ちょうどモップのように砂の表面をなでて、そこに落ちているゴミ（といっても、それは栄養のかたまりです）をとらえることができるでしょう。そうならば、ヒドロ虫にとっては大変な得があることになります。そんなふうに考えると、ひょっとするとヒドロ虫はロウソクガイにいそろうしているだけなのかもしれない、と疑ってしまいますが、本当のところはどうなのでしょう。じっと生き物たちの暮らしを見ていれば、もしかしたら答えがわかるかもしれません。

## ● 阿嘉島の海より

寒さもやわらぎ、暖かく感じる日も多くなってきました。そんな中、阿嘉小中学校では平成 23 年度の卒業式が行われました。今年は、小学校から 6 名、中学校から 2 名の児童・生徒が卒業していきました。中学校を卒業した 2 名は、4 月からは島を離れ、沖縄本島の高校に通うこととなります。大きな学校、慣れない土地での生活に最初はどうなるかともありますが、次に島で彼女達に会うときには、一回りも二回りもたくましくなった姿をみることができるでしょう。

